審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 3020 号	氏名	坂本 早季
審査担当者	主 査	牛島高介 (印)	
	副主査	西 昭徳 (印)	
	副主査	古賀浩徳 (印)	

主論文題目：**Complications in patients with neurological impairment after gastrostomy**
（和訳　重症心身障碍者における胃瘻造設術後合併症の検討）

審査結果の要旨（意見）

重症心身障碍者での経鼻胃管による栄養管理は、経鼻胃管から生じる咽頭刺激による分泌物増加、側弯症による挿入困難等で、その管理に難渋することが多く、経皮的内視鏡的胃瘻増設術（PEG）や腹腔鏡補助下胃瘻増設術（VAG）が行われている。本研究はVAGの術後合併症について検討し、短期的な合併症のみならず、長期的な経過を検討した点が本研究の特徴である。合併症は時間経過とともに減少すること、術前の低栄養状態が長期合併症の発生に影響すること、年長者において皮膚障害が長期に持続するリスクが高いことなどを明らかにした。医療の進歩により、生命の維持や生活のために胃瘻等の医療的ケアを必要とする子ども達（医療的ケア児）は年々増加しており、臨床的に高く評価される。

論文要旨

重症心身障碍者（以下：重心者）では経鼻胃管による咽頭刺激のため分泌物が増加し呼吸を妨げる場合や、側弯症の進行による挿入困難など、経鼻胃管での管理に難渋することがしばしば存在する。側弯症などの解剖学的理由から経皮的内視鏡的胃瘻造設が困難な場合もあり、腹腔鏡補助下胃瘻造設（VAG）が有用である。しかし、VAGの術後合併症について検討された報告は少ない。本研究は、当院におけるVAG術後患者82名を対象に短期及び長期の合併症の有病率と患者背景について後ろ向きに検討を行なった。合併症として肉芽増生や胃瘻漏れ、皮膚障害、感染、事故抜去、嘔吐、イレウス、腹膜炎が認められた。長期合併症率は短期合併症率より有意に低く、長期合併症を有する患者群の術前の予後栄養指数は、合併症がない患者群より有意に低値であった。術後時間経過と共に肉芽増生、感染、および嘔吐の頻度は減少したが胃瘻漏れや事故抜去は増加した。皮膚障害は短期から長期にわたり持続して認められる症例が多く、また、年長者例で有意に高頻度に認められた。これらのリスクに留意し胃瘻管理を行うことで合併症の発生予防につなげられると考えられた。また、術後合併症に関して詳細に情報提供することが胃瘻造設を選択する際の一助になりうると考えられた。